

平成艸紙



おりおりの記

密かな喜び

KKRジャパン
会長

斉藤 惇

仕事から離れた「おりおりの記」を書かないかと言われて机に向かってみたが何を書けばいいのか全く頭に思いが浮かんでこない自分にびっくりした。ひどくショックであった。

ヒントを求めて先人の残した記述を読んでもみると、小唄の話、旅行の話、ワインの話など実に楽しそうな趣味や心む話書いている。

思えば大事をなした先輩たちも、それぞれの世界で日々の仕事から離れた空の時間のようなものを持っていたことにハッとさせられた。完全に仕事から解放されて、自分を忘れさせるほどの心の安らぎの場所をみんな持っていたのではないかと思いはじめた。

野村證券を創設した野村徳七翁が、京都南禅寺でかぼちゃ畑を潰して琵琶湖疎水の水を引き入れ、東山を借景とした野村別邸を作り始めたのが齢四〇歳ぐらいだったと聞く。翁はそこで茶道と禅の真髄を求め能にふけり、静かな心のおき場所を求めたようだ。

かつて証券界で直接仕えていた先輩諸氏もあの激動の中で端唄や長唄、小唄そして茶道や禅の道に身を浸していたように思う。心の余裕を持っていたのだろう。

それに引替え自分は齢七十七歳にもなろうというのに艶のある楽しみの道も、厳しい禅や茶道にも全く音痴、無知ではないか。

絵画、音楽、端唄や小唄、お茶、ワインやお酒、

野球、サッカー、旅行どれにも我を忘れた気が狂うばかりの熱のある嵌り込みが全くない。

ただただ目の前にある仕事だけが「わが人生の趣味」では、

自分があまりにも可愛そうだと思って、ふと気がつく「そうだ俺には畑があるではないか」。

改めて考えてみると春夏秋冬、暑かろうが寒かろうが、時間さえあれば自分は庭に出て全く心を空にして草取り、水遣り、芝刈り、肥料いれ、土の耕し、木の剪定、何かをやり続けていることに気がついた。

野菜と花と芝と木々を季節の変化に合わせて一定の美しさに保ち続ける喜びは、自分の心の底から湧いてくる。人間よりもはるかに素直な植物たちは、手入れと気配りの度合いに見事に反応する。そこには完全に娑婆を忘れ、暑さ寒さを忘れ、体の疲れも腰の痛み感じない無の境地がある。これは作曲家や画家たちの心境と同じなのだろうか。

我が人生の小さな、密かな喜びである。

